平成 25 年度教職大学院派遣研修研究報告書

派遣者番号	25K08	氏　名	八代　史子
研究主題 ―副主題―	小学校知的障害特別支援学級における保護者支援に関する一考察 ―ライフヒストリー分析に基づく研修プログラムの開発―		
所属校	武蔵野市立境南小学校	派遣先	帝京大学教職大学院

項　目	内　容
Ⅰ　研究の目的	近年、子供の重要な支援者・理解者として保護者一人一人とよりよい関係を築いていくことが、ますます求められている。しかし、そのような捉えの下での保護者との連携は以前に比べ難しくなってきていると感じている。それは、右肩上がりに増え続ける特別支援学級在籍児の数と、様々な障害種や障害の程度への対応が必要となってきている現状によるものである。在籍児童の増加及び実態の多様化は、同時に保護者の増加と多様化でもあり、それに伴って学級や担任に対する願いや要望も、増加し多様化していると考えられる。それらに対応するためには、願いや要望の背景にあるものを教師がより深く理解すること、または理解しようとすることが重要であろう。 そこで、小学校知的障害特別支援学級に在籍する子供の保護者が、我が子の成長過程でどのようなことに悩んできたか、そして保護者を支援する立場の教師はどのような役割を求めてきたのかを、保護者の語りによって明らかにしたい。またその成果を基に、校内のおける保護者支援に関する研修プログラムを開発し、保護者対応に悩む若手教員への還元を図りたい。 そのような問題意識に基づき、次の２点を研究の目的とした。 １　学童期を中心に、知的障害特別支援学級の保護者が子供の成長過程でどのようなことに悩み、教師に対してどのような支援を求めてきたのかをライフヒストリーの手法を用いて明らかにする。 ２　１によって明らかになった、学童期での保護者の悩みの変容と教師の支援との関わりを基に、知的障害特別支援学級を中心とする若手教員を対象とした保護者理解と支援に関する校内研修会を実施し、その効果を検証する。
Ⅱ　研究の方法	１　先行研究 本研究は、知的障害のある子供の保護者の悩みの様相をライフヒストリー法によって明らかにし、保護者理解と支援の在り方について見直すことを目的の一つとしている。よって先行研究として、その目的において障害のある子供をもつ保護者に関する研究を、その方法においてライフヒストリー法について概観することで、本研究の意義を示した。 ２　ライフヒストリーによる保護者の語りの分析 知的障害特別支援学級に在籍またはかつて在籍していた子供の保護者４名を対象とする半構造化インタビューによりデータを収集した。（調査協力者には、研究の目的・方法について事前に説明し同意を得ている。） それを基に、インタビューの内容を逐語記録に起こす→４人の語りを時系列で編集し、コードを付与する→キーワードの生成→保護者の心情と子供の成長、教師の姿に焦点を当て概念（カテゴリー）化→概念図・ストーリーラインの生成→各カテゴリーの検討、の手順で分析を行った。 ３　研修プログラムの開発・実施 次の２点を狙い、特別支援学級担任を中心とした所属校の若手教員を対象とした校内研修プログラムを開発・実施・検証した。 (1)小学校知的障害特別支援学級の保護者のライフヒストリーを通して明らかになった、小学校段階での悩みの変容と各段階で教師に求められる保護者支援を基に、カウンセリングマインドに立った保護者対応の在り方について考えを深める。 (2)演習を通して、日常的に保護者と教師をつなぐ連絡帳の意義と限界について深め、信頼関係を築くための活用の仕方について参加者同士が学び合う。

Ⅲ　研究の結果	１　ライフヒストリーによる分析結果 ライフヒストリー分析により、九つの小カテゴリーが生成され、その内七つは二つの大カテゴリーにまとめることができ、全体として三つの大カテゴリーとなった。それを基に以下のストーリーラインを導いた。 小学校知的障害特別支援学級に在籍する軽度知的障害児の保護者は、集団の中での障害の分かりにくさを経験しながら、就学前の段階で徐々に**【見えにくい障害と向き合う「覚悟」】**を決めていく。特別支援学級入学後も**【成長の見通しの立たない不安】**は続いていくが**【子供の成長で保護者を安心させられる教師】**によって、我が子の成長を喜んだり特別支援学級のよさを実感したりする。徐々に学校生活に慣れ始めると、交流学級や学童などで**【障害のない子供との関わりが生む明暗】**が生まれる。そこでは、子供を取り巻く環境に対して**【周囲の理解を促しコーディネートする存在としての教師】**により、保護者は安心感をもつ。進学を意識するようになると、我が子への理解が進み、苦手なことを更に頑張らせるかどうか**【苦手なことを巡る葛藤】**が生じる。それに対して**【我が子の別の姿を知る相談相手としての教師】**の関わりにより、我が子の捉えに気付きや変化が生まれる。 **《①「軽度」であることの期待と不安》**を抱えた保護者に対し**《②「二人三脚」の相手としての教師》**が６年間を通して支援していくことで、保護者は、特別支援学級を選んだことに対して**【「この選択は間違ってなかった」】**と思えるようになる。その過程において**《③連絡帳による保護者と教師のつながり》**は、重要な役割を果たしている。 ＊《　》…大カテゴリー　　【　】…小カテゴリー ２　研修プログラム (1) 経験年数の異なる参加者で編成された小グループでの意見交換を通じて、先輩教員の経験の中からの学びが初任者に継承されていた。 (2) 評価シートの分析より、参加者が連絡帳の書き方ではなく、自己の振り返りや新しい視点での保護者の捉え直しを学んだことが分かる。これは、会の目的や意図が参加者に正しく理解されていたことの成果であると考える。また保護者対応については、初任者～５年目頃までは、保護者対応に関する基礎的・基本的な知識及び具体的な対処法を、６年目頃以降になると、保護者の思いやニーズを把握した上での保護者対応の方法に関心があり、それらの違いに沿ったプログラムを今後開発していく必要がある。 (3) 知的障害特別支援学級や知的障害の理解については、研修内で十分な学びにつなげることはできなかった。これは、若手教員にとっては今自己の抱える課題の解決が優先であり、特別支援学級の担任になるという発想ができる段階にないことや、知的障害特別支援学級また知的障害に関する知識や情報の不足といった原因が挙げられる。
Ⅳ　考察	保護者にとって、我が子を受容することは、障害児の親である「私」を受容することにつながっており、そこに至る過程で教師は重要な役割を担っていた。個人の生活構造の中で、当事者の主観とその人を取り巻く客観の関係を、長いタイム・スパンで把握しようとするライフヒストリー法によってこれを見出せたことは、今後、保護者を理解し支援していく上で、新たな視点を与えるものであった。 一方、結果の活用にあたっては、限定された調査協力者の語りの共通性を見出す研究であることの限界もある。 研修においては、連絡帳の役割に焦点化したことが若手教員のニーズに合致するものであり、保護者理解と支援という点での意識喚起につながった。特別支援学級への理解という点では、通常の学級の若手教員のニーズを把握しながら、特別支援教育や知的障害への理解を、校内で計画的かつ日常的に深めていくようにしたい。